

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第二2:1～11 「裁きと赦し」

[1-4] 「そこで私は、あなたがたを悲しませることになるような訪問は二度とくり返すまいと決心したのです。もし私があなたがたを悲しませているのなら、私が悲しませているその人以外に、だれが私を喜ばせてくれるでしょうか。あのような手紙を書いたのは、私が行くときには、私に喜びを与えてくれるはずの人たちから悲しみを与えられたくないからでした。それは、私の喜びがあなたがたすべての喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからです。私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした」

ここでパウロは1章23節で語った「思いやりのため、まだコリントへ行かない」ことの詳しい理由を説明している。彼はこの第二の手紙を書く前に「使徒の働き」には書かれていないが、コリント人たちを「悲しませる訪問」を短期間していたと思われる（第一回伝道旅行の時ではない）。その訪問の目的は一部のコリント人たちを譴責するためであった。それは相手を悲しみに沈めてしまうためではなく、悔い改めさせて、主に立ち返らせるためであった。そしてこの訪問の後、パウロは彼らが悔い改めることを願って、大きな苦しみ、嘆き、涙ながらの手紙を書いた（この手紙は今日では失われている）。彼がそのような手紙を書いたのは、コリント人たちに対する愛からであり、しかもそれはあふれるばかりの愛であることをよく理解してほしいと願う。

[5] 「もしある人が悲しみのもとになったとすれば、その人は、私を悲しませたというよりも、ある程度——というのは言い過ぎにならないためですが——あなたがた全部を悲しませたのです」

ここでパウロは控えめな表現をとりつつ、問題の人物に対する厳しい処置はパウロ自身を悲しませただけでなく、コリント教会全部を悲しませたことになると言う。キリストのからだである教会の一部が痛めば、からだ全体が痛みを覚えるのである。

[6-8] 「その人にとっては、すでに多数の人から受けたあの処罰で十分ですから、あなたがたは、むしろ、その人を赦し、慰めてあげなさい。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。そこで私は、その人に対する愛を確認することを、あなたがたに勧めます」

コリント教会は問題の人物を厳しく処罰した。そこでパウロはもうその処罰で十分なので、こんどはその人を赦し慰めてあげなさいと勧める。なぜならそのまま放っておくとその人物はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれないからである。パウロはただ問題の人物を厳しく裁けばよいと思っているのではなく、その人物の回復を願っている。懲らしめの目的は立ち返らせることにあり、次になすべきことは愛をもって再び教会の交わりに加えることである。

[9] 「私が手紙を書いたのは、あなたがたがすべてのことにおいて従順であるかど

うかをためすためであったのです」

パウロがああ悲しみの手紙を書いたのは、コリント教会の人々が彼のことばに従って正しく処罰するかどうか、従順であるかどうかをためすためでもあったのである。[10]「もしあなたがたが人を赦すなら、私もその人を赦します。私が何かを赦したのなら、キリストの御前で赦したのです」

パウロはここで、自分が赦すという行為をコリント教会の人々の赦しの行為と結びつけている。それほど彼はコリント教会を愛し、信仰による密接なつながりを持っている。しかも彼が赦したことはキリストの御前で赦したのだと、その確実性、普遍性を強調している。

[11]「これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません」

悔い改めた者を赦さないでいると、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまい、絶望し、そしてサタンはその人を虜にして再び罪を犯させてしまうかもしれない。そのようなサタンの策略に陥らないためにも、教会は悔い改めた者を赦し。愛と慰めをもって受け入れ、再び交わりに加えていかなければならない。

私たちがこの箇所から、裁きと赦しとはどういうものであるかをよく学び取る必要がある。

最後に→Ⅱテモテ4:1～2